

*****目次*****

- P1 今号のTOPICS 溝部浩二
 P2 仲間たちの近況報告 (1)
 1班 清水 忠
 2班 堂瀬広幸
 P3 仲間たちの近況報告 (2)
 3班 松堂忠義
 4班 中山勝一
 P4 仲間たちの近況報告 (3)
 5班 古賀さつ子
 6班 木村 弘
 P5 私の玉手箱 武川雄二
 P6 樹形ウォッチング遊上真一
 P7 自由コーナー 竹谷律一
 P8 リレー随筆 米虫和子
 絵画コーナー 岩城正大
 俳句コーナー 谷坂修二

◇自然と文化だより◇

28号に投稿いただいた皆様、有難うございました。

今回のTOPICSは溝部代表に2年目を迎えるにあたって抱負を寄せていただきました。今後とも新しい活動に取り組んで、活動を活性化していくことが今後の継続的な発展には必要になると思います。

K.Nomu

今号の TOPICS

新年度に向けて

代表 溝部 浩二

時のたつのは早いもので今年の4月で自然と文化科が発足してから12年経ちます。新年度を迎え当科の運営や課題について、いくつか述べてみたいと思います。

まず初めに、これまで同様「来る者は拒まず、去る者は追わず」の基本方針のため入科・退科ともにあって、新年度の科員数は現在よりも数名増加して105名と予想されます。100人を超える人員としては3年目になりますが、今年度の反省を踏まえて、再度新しい気持ちで科の運営に努めたいと思います。大人数のため観察や歴史文化探訪などでは活動場所に制約が出てきますが、工夫・改善に心掛け、できるだけ全員が同じ日に共通の体験をして、一体感の維持や懇親が保たれるようにしたいと考えています。また、新年度からは4班体制に戻り、班の人数が増加するので、班としてまとまった行動をするよう、これまで以上に科員一人ひとりが心掛けていく必要がありますので、皆様のご協力をお願い致します。

次に各委員会活動の活発化です。例えば委員会ごとにおおまかな年間テーマや目標を決めておき、日常活動の中で少しずつでも取り組んでいくことが大切ではないかと思います。年間目標などなじみの少ない委員会もあるかもしれませんが、あまり堅苦しく考えずに、活動面に制約の出ない程度に課題を設けていくやり方もあると思います。100人を超える大所帯で毎年同じような内容の活動を繰り返しているといつの間にかマンネリに陥りやすくなります。これを避ける意味でも、意識的に活動に変化を付けていくことが大切ではないでしょうか。また、こうした活動の結果を、共通講座後などに科内発表会で発表し、科員相互の研修の場にすることも考えられます。

次に社会貢献活動の拡大です。社会貢献委員会が担当する大阪ガスグループ福祉財団から委託を受けたシニア自然観察会を、新年度は7回予定しています。新年度からはこれとは別に、小学生対象の環境体験学習の受託業務を具体的に推進していきたいと考えています。既に多くの科員の方が地元等で行っているとは思いますが、当科としてはこのような社会貢献活動を活動の大きな柱の一つに位置付け、より多くの科員の皆さんに参加いただきたいと思っています。

最後に、活動方針の中に「参加して楽しく、心が通い合う研究科を目指す」とあります。これは当科の活動における基本的に大切な視点です。「参加して楽しい」すなわち「楽しむために参加する」ということです。自分もそして科員皆も楽しむために、自分として科のために何か役立とうという考え方で、できるだけ多くの方々に協力いただき、科の運営に携わる幹事・班長などの役割りを分担していただけたらと思っています。当科が今後ますます発展していくには、このような考え方を持っている方々がどれだけたくさんいるかに掛かっていると思っています。ご協力、ご支援をよろしくお願い申し上げます。



わが町を考える

1 班 清水 忠

私の原動力になっているわが町は、妙見山を挟んで東と西の麓にあり、自然環境に恵まれ、農林業を中心にした旧市街と新しく開発された住宅地域が入り交ざっているところです。4つの小学校区があり、自治会等の活動拠点が6地区に分かれ、この中でわが地区は昭和46年から造成された住宅地域で、6地区の中で最も人口が多く、高齢化率46.4%と顕著に進んでいます。自治会加入率も69.2%で町内でも最も低く、限界集落に近づきつつあります。けれども、交通便は能勢電鉄が10分間隔で運行し、地区内に阪急バス路線もあり、2つのスーパーマーケットと図書館、文化ホール、町役場支所、公民館、高齢者コミュニティーセンター、保健所等の公共施設が近くに整っているため、比較的利便性が良い地区です。

地区の自慢として、①健康への関心が高い②ボランティア活動が活発③緑や自然が多い④公共施設が充実している⑤教育面が充実している⑥あいさつをし合う人が多く、何かあれば声をかけ合う、住民同士のコミュニティーが比較的良い町です。

このような条件の中で、地区の取り組みとして、「わたしたちのアクションプラン（2016～2020）」計画を立てました。

地区の目標、「自分と地域のために程よいおせっかいをしましょう。」

行動指針、「空き家を利用し、高齢者の能力を活かし、一人ひとりが楽しく集える交流の場づくりをしよう。」

<具体的な取り組み>

- (1) 高齢者が多い地区だからこそ、高齢者の力を活かす。(2) サロン活動や集いの場づくりを充実する。
- (3) 住民どうしの支え合い活動を増やす。
- (4) 障害者や子ども達と交流する

日本には限界集落が10091か所もあり、大都市の東京都新宿区でさえ戸山団地地区高齢者率52%と限界集落となり孤独死が多い所です。都の政策で低所得者の単身高齢者を1DK高層住宅に集めた結果であり、限界集落はどこでも起こる現象です。自分の問題として考えなければならないことでもあると思います。

来 夢 来 人

2 班 堂瀬 広幸

1月22日穏やかな日の中、神戸北野町界隈の寺院を久しぶりにゆっくりと歩いた。昔から比べると随分賑やかになり、様変わりした風景で何だか味気ないように見えた。その当時はもっと静かだった。週末でもこの界隈は寂然として、歩く人も華僑、印僑、英人、米人等がゆっくりと行き交うだけで、あまり邦人は見かけなかったように思う。少年の頃、モスクからコーランを唱える声が聞こえ、何とも不思議な気分になったことを憶えている。

神戸は多様な民族、文化、宗教が共生する風土をもった街であるが、もう一面違った貌もある。大正から50年ほどの間に40万人の人々がここ神戸港から南米へ旅立った場所、「ブラジル移民発祥之地」。大正8年に神戸移民収容所が山本通に設けられ、全国から移民政策に乗って人々が集まり、7～10日程の間に彼の地の言語、習慣等を学び、神戸港から商船に乗り一路サントスへ向かった。最後の日本の記憶はおそらく神戸六甲山の山々と、その下界に広がる神戸の街を今生の記憶として、涙したと思う。小学生の頃同級生を見送りに行った。人混みの中、楽団が蛍の光を、船からは銅鑼が鳴り響き、紙テープが船と岸壁を繋ぎ、今生の別れを惜しんだ。船上の人たちはどんな夢を紡ぐ旅だったのか、知る由もない幼年の原風景であった。

この政策は昭和46年に幕を閉じる。平成に入り、神戸はJR西日本のキャンペーンの三都物語でエキゾチック神戸をPR、しかしその4年後、阪神大震災で異国的神戸は壊れ、「美し都～がんばろうやーWe love Kobe」に代わる！

神戸人＝陳舜臣は「新しい神戸は、一部の人が夢見た神戸でないかも知れない。しかしもっとかがやかしい街であるはずだ。人間らしい、温かみのある街。自然に溢れ、ゆっくり流れおる美わしの神戸よ。そんな神戸を私たちは胸に抱きしめる。」英、米、独、仏、蘭、露、印、清等の人々の安らぎの聖地は今も変わらず、昔の儘である。震災に遭ったにもかかわらず～

三宮周辺を5年程かけて再開発する計画がある。誰が、どんな夢をもって来るのだろう。



廃棄カツカレー事件から想うこと

3班 松堂 忠義

永年、食品業界に関わって来た者として、冷凍カツ廃棄食品の横流し事件には忸怩たる思いがある。今回の事件は関係業者の食品衛生に関する法規（大きく４法）の無視・無理解が原因であるが、日本の「食」の現状から見ると、私たちにも非常に重い課題が突き付けられているように思う。現在、日本は食料の約６０％を輸入に頼っているにも関わらず、下記するような「食品ロス」を発生しているのが現状である（＊食品ロスとはまだ食べられるにも関わらず、廃棄されている食品の事を言う。）

日本の食品ロスの現状（Ｈ２２年農水省試算）

食品消費量（約８５００万トン）

食品廃棄物（約１８００万トン）

内 食品ロス（約５００～８００万トン）

〔事業系から（規格外品等）３００～４００万トン
一般家庭から ２００～４００万トン〕

上記のように「食品ロス」は流通業界と家庭から出されるものが多い。家庭から出される食品ロスは約３００万トンとされ、大半のものが・食べ残し・賞味期限切れ（手つかずの食品）で約４０％を占める。これらの廃棄食品は主にゴミとして焼却・廃棄され再び利用されることはない。その原因は我々消費者が過度の安心・安全を求め続けたのも一因とされている。私達の意識・生活の変革も求められている事になる。一方、食品流通の業界では１／３ルールという悪しき商慣行が存在する。賞味期間が１／３残っているにもかかわらず、店頭から商品を引き上げるといふ悪しき慣行である。行政もＮＰＯも手を拱いている訳ではない。

「食品ロス」対策の一つとして、社会福祉団体である各地のＮＰＯ団体のフードバンク（全国に４２団体）が食品衛生上問題のない食品を無償で受けつけ、各地の市民団体を通じて野外生活者・生活困窮者に食品を供給するというシステムも活動中である。日本の社会は格差拡大の傾向が見られ、厚労省の発表（２０１４年）では１８歳未満のこどもの貧困率は１６．３％、６人に一人が満足に食事もとれない状態にあることをよく理解したうえで、自分達にも何か出来ることがあるのではないかとと思う昨今である。

マオリの文化に接して

4班 中山 勝一

１月下旬に地球環境・自然学講座の海外観察会でニュージーランドへ行ってきました。広大な干潟が広がるエイベル・タズマン国立公園で、森里海連環を学ぶというテーマでした。トレッキングやシーカヤックにも打ち興じましたが、先住民マオリ族の伝統的儀式に参加し、日々祈りを伴う今回の旅行は、マオリの自然観とその自然保護について考えさせられました。

マオリは自然神信仰であり、「父なる空と母なる大地、その間に生まれた山や森や川や海は皆兄弟である。」、そして必要以上に自然を貪らないという思想はどこか日本人の宗教観とも共通するものがあります。薬草観察会の中で先人の知恵を大切にする姿に古い良き日本の姿を見出しました。

一方ヨーロッパ人が自分たちの持ち込んだ文明による自然破壊に直面し、その反省からマオリの自然観を取り入れ、自然保護の基盤づくりに活用している点も興味深いものがありました。禿山を百年掛かって昔の森に蘇えさせた話は日本でも六甲山や別子銅山を思い出させますが、その間先住民族と移住民との間には長い間の葛藤があったと思います。

近代文明を切り開いた一神教のヨーロッパ人の子孫が、結果としてマオリの自然神を受け入れ、独自の価値観を築いて行こうとする姿は、今後の日本に大きな示唆を与えていると思います。従来のユニオンジャックと南十字星の国旗からマオリの象徴であるシルバーファーンと南十字星の国旗に変えようとしているのもその表れです。農業牧畜大国として、また観光大国として新たな国作りを目指しています。



翻って他国と比べて人口密度が高い中で、更に都市一極集中と農村・山村の荒廃が進む日本では、自然に寄り添った伝統文化、農村文化も後退しているように思います。東北大震災の復興として沿岸部を盛り土し、巨大な堤防を築く先に何を見据えているのでしょうか？近代文明の限界を見極めつつ、先人の知恵にも学び、過度に集中せず、自然との共生とは何かを考え、国土全体を再生するという試みが今の日本では求められているように思います。

私おばあちゃんになりました

5班 古賀 さつ子

『孫は可愛いものよ。』 そうだろうね・・・。

『やっぱり自分の息子のほうが可愛いわよ。』 そうなんだ・・・。

これまで友人や私の周りの人から、お孫さんとの係わりの中で得た、楽しさや大変さ、時にはお孫さんの自慢話等を沢山聞いて知識を得てきました。

これで私も”おばあちゃん入門編”クリアです。予習は完璧です。

そして遂に昨年『私に孫が出来る』と息子から知らせがはいりました。以前から温めていた考えを実行すべく、私は孫に、私を“さっちゃん”と呼ばせて欲しいと息子に頼みました。孫と友達のような関係が築けたらいいなと思ったからです。

今年一月、息子一家が里帰りをし、いよいよ孫との対面です。（これまでスカイプを利用して度々様子を見聞きして分かってはいたのですが・・・）実際の、生後2ヶ月の、孫の印象はと言うと、「ちっちゃ〜い！」続いて「息子にそっくり〜！」あまりの息子似に大昔の子育てをしていた頃を思い出しましたが、今は昔と違って育児に関してもいろいろと進化していました。

それはさておき、3週間の滞在中に孫は目に見えて成長し、泣き方にも感情がこもり、何より話しかけると笑ってくれたのです。

その笑顔は、例えば、どんなに怒っている人でも、あるいはどんなに落ち込んでいる人でも、笑顔に変えてしまうに違いない、と思えるほど魅力的でした。

これからどんどん成長していく孫との関係をより深めながら、私も（老いていくばかりですが）何かしら成長できたらいいなと思っています。

あ、そうそう息子について言うならば、私の場合“可愛い子”というより“大切な子”ですね。

それにしても、赤ちゃんの笑顔って、何と私たちを幸せにしてくれるのでしょうか！

光彩を求めて

6班 木村 弘

ある日の観察会で、あるひとが「情景も楽しみながら行くといいですよ。」と言われていた。たとえ登り道でも、その歩みは物静かなものであった。ワイワイ同定しながらのものも楽しくはあるが、感動を伴ったものにするには物静かなほうがいいのかもしれない。

一美しい「花」がある。「花」の美しさという様なものはない。一と言ったひとがいた。よく観て、感じとることも一興かもしれない。その名がわかると、なおよいかもしれない。死線をさまよっている時に現れるという、走馬灯に現れる如くに焼きついてくれるといいのだが、その保証はない。

ところで、最後のチャンスとばかりに昨秋から写真をはじめた。その昔、“シズル感”（食欲をそそる感覚から転じて、五感を刺激するような感覚に使われる）を要求されて悩まれたが、多少気合をいれて光彩を撮れるカメラを選択したものの、またそれが実感されつつある。まず高機能化している（覚えることが多い）。また操作にスピーディさもある（手や指の動作が鈍っている）。揺れを止める必要がある（筋力が落ちている）などこれに対処する必要がある、体力増強が必要になってきた。そこに被写界深度だの、構図だの、光の加減だのが加わってくる。まさにボケておれないのである。おまけに、マクロにまで手をそめると、拡大してピントを合わせるといいですよ、といわれても、そのシビアさにシビレルばかりなんてこともある。

ある日、冬芽や咲き始めた花を撮りに出かけた。シャッターを押す瞬間に息を止める。が、それが長

すぎて息をするのを忘れてめまいを起こしたり、こっちが止まっても相手が揺れてくれる。ピントの合うところによって、雰囲気も違ってくる。シズル感云々



の世界にいつ到達するのか心もとない今日この頃ではある。が、時は今、フィールドにはワクワク感があふ

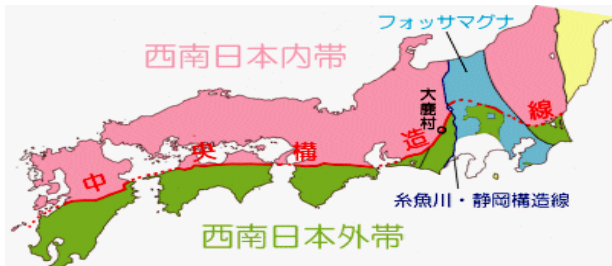


れてきますねえ。出かけましょう、光彩を求めて。

高見山と中央構造線

4班 武川 雄二

「中央構造線」という言葉があります。地学用語で九州から四国、紀伊半島を通り関東まで達する大断層のことです。地図を見ると四国の吉野川から紀の川を通る線がよく見えます。まるで西南日本を北と南にスライスしているようです。実は遠い昔こ



の線を境に北側（内帯といいます）と南側（外帯）は別のところにあったのです。1.3億年ほど前、日本列島が現れかけたとき、紀の川の南、和歌山側や四国、九州の南半分など外帯は南の海にありました（図1）。それがプレートに乗ってやってきてくっついたのです（図2）。当然この線を境に北と南では地質がまったく変わります。

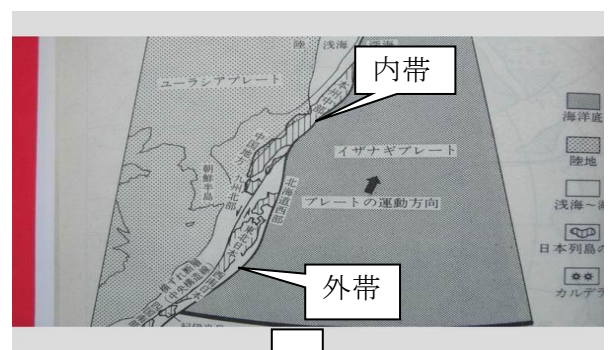
今年2月1日、箕面探索同好会の行く先は高見山でした。霧氷を見るのが目的でしたが、私には別の興味もありました。高見山は奈良県と三重県の県境にありますが、実はこの中央構造線沿いに位置しています。内帯と外帯の境界でもあり、両方の地質が見られるのではという期待です。高見山を目指すコースの前半、登山口から伊勢街道の石畳道を登っていると道脇にまるで薄板を積み重ねたような緑色っぽい岩がたくさん現れてきました。これは南側（外帯）の三波川帯という地質で結晶片岩という岩です。プレートが地下深くで熱と高压で変成されてできた岩で、四国の大歩危峡や和歌山城の石垣もこの岩です。なかなか綺麗ですからよく庭石にされています。そして高見山は内帯にあります。花崗斑岩という火成岩からできており、浸食に強いことから「関西のmatterホルン」と呼ばれるような尖った山容になっているようです。ですから途中からは険しい坂道となりました。山頂に近づくにつれ、「国見岩」という神武天皇が東征の際上って四方を見たといわれる岩をはじめ、大きな岩がたくさんありました。



頂上付近はあいにくの霧で、周りはなにも見えませんでした。晴れていれば曾爾高原方面、大峰山系、台高山脈など素晴らしい眺めが見られるそうですが残念でした。高見山がどうやってできたのかよくわかりません。ただ1500万年程前大台ヶ原、大峰山近くで巨大火山噴火があり、その火砕流で室生曾爾村の屏風岩、鎧岩など、また奈良の三笠山や二上山までできたといわれています。現在の阿蘇に匹敵するほどの大きなカルデラがあったとのことです。高見山生成にも影響があったかもしれません。今回は美しい霧氷とともに古い地球の営みの一端に触れられ、楽しい行程となりました。数年前、「2億年程前日本列島は海溝の底だった」と甲山周辺を案内してくれた地学の先生から話を聞きました。さっぱり理解できず、呆然とするばかりでした。その後この先生について教えてもらうようになりましたが、地球46億年の歴史は深い。いまだよくわかりませんが、少し面白くなりかけてきたところです。



（図1）：1億3000万年前 外帯は南の方



（図2） 7000万年前 内帯と外帯が合体



樹形 ウォッチング

自然の中で生きている樹木を観察すると、それぞれの環境に適応した樹形となっていて
その逞しい生命力に感動させられます
そして それを巧みに利用してきた 人々の知恵と、文化にも注目してみましょう。

5班 遊上 眞一

尾瀬の倒木更新



昨年 7 月に 尾瀬沼北岸のシラビソ・コメツガの森を歩いていますと、コメツガの大木が、何本も幹折れしていました。自然の厳しさを 感じます。



古い倒木を 見ると、苔むして シラビソの実生が生えています。倒木の上は、害を及ぼす菌類が少なく 地表よりも光が得られるため、稚樹にとっては生育しやすい環境なのでしょう。



シラビソが 2 本並んで 大きく育っています。良く見ると 倒木の上に生えています。そして倒木を跨いで、地面に根を下ろしています。



倒木更新の土台となった枯れ木が朽ちてなくなると、根元が地上に浮いたように見える根上がりの樹形に。

尾瀬、北ハヶ岳、芦生の森、屋久島など水分が多い森だから、倒木更新がおこるんでしょうね。

チョットしたハプニング

6班 竹谷 律一

我が家で見つけたハプニングをご紹介します。

【その1】3～4年前に買ったお正月お飾り用の柳の小枝（金や銀色に彩色したお飾りセット）から何を間違えたか根が出て芽が出て育ち始めました。毎年リユースする奥さん、今年は生け花の花瓶と一緒に生けた由、奥さんの観察結果を確認すべく別の枝で追試、2週間ほどで再現されました。柳のこの生命力はどなたかご存知ですか？ 今は土の植木鉢に移転いたしました。生命継続中です。



【その2】昨年11月ごろ我が家の窓にカワセミのオスが激突死、枚方の“市の鳥”に指定されています。生ゴミにするには余りにも惜しい。野鳥の会のK嬢に電話して剥製制作について伺う。「まず冷凍庫に入れて下さい！」に従って実行、勿論その前に奥さんを説得、入庫許可を取得。牛や豚、鶏が入っているのだから、という理屈。ネットで見た〇〇剥製に電話、「捕獲証

明書と共に宅急便、冷凍扱いで送付ください、2万4千円です！」それから枚方市役所の自然保護課、大阪府庁の関係部署、挙句の果て獣医さんに死亡鑑定書を依頼するも「市役所の保護課職員の立ち合いが必要です。」何と仰々しい事か！



交野市の自然観察小屋の係りの方に伺うと剥製屋を紹介頂いた。即持参、「1万3千円、1か月半で仕上げます。」にニンマリ！初めからここへ来ていたら、高いな～と思ったでしょうが。

【その3】また鳥の話です。ジョウビタキのメスの珍客。朝、作業台の片隅にじっとこちらを見つめる小鳥。驚いた、カワ

セミが出来て間もないこの時期、何が起こった？と現実を見失う感じ。孫たちの悪戯（鳥の玩具と勘違い）？本物？生きてるの？子供と奥さんを呼びに行くと廊下に降りている。生きてるんだ、本物だ！が実感。カメラを持参。昨日小生ここで少し作業、網戸を一時開けていた。その隙に入り込みその後一晩泊ったのだ！ハッサクを切って置いてやるとすぐに食べた。よほど緊張して喉も乾いたんだろう。そっと戸を開けたらすっ飛んで行った。可愛い白い置き土産2、3個残して。 完



奈良に魅せられて

1 班 米虫 和子

昔から、「奈良」に魅せられて移り住んだ人は多い。私も「奈良」が好きだ。我が家からは、京都のほうがずっと近いのに、なぜかより「奈良」に魅かれる。

「京都」は雅で華やか、見るところがいっぱいで、かえって疲れてしまうことがある。それに比べて、「奈良」は地味で素朴な味わいがあるように感じる。ゆっくり流れる時間を楽しむことができる。確かに観光客は多いが、一歩メインのコースから外れると、ほとんど人と出会うことのない場所がいくらかもある。

例えば、人の手が少し入った春日山原始林。全くの原始林ではない。千何百年もの長い奈良の歴史の中、森はやさしく人に寄り添っているし、人もまた森を大切にし、敬っている。人の生活圏のすぐそばに、非日常の空気が存在する。原始林の中では何も考えず「ボーっ」とできる。頭の中を空っぽにして、ひたすら森の空気を吸い込みながら歩く。歩いている自分が現実なのか、これは夢で、都会の中の自分が本当なのか迷いながら。

または、飛火野。奈良県奈良市街の東、春日大社に接する林野である。奈良公園の一部で、712 年烽火(のろし)が置かれた地で、万葉集などの古歌によまれ、歌枕としても有名である。ここも、春日大社の参道近くは人がいっぱいだが、その奥、鹿苑の裏側になると、ほとんど人がいない。たまに写生をしている人を見かけることがあるくらいだ。ここは藤が素晴らしい。人のほとんどいない中で、見事に咲き誇る藤を見る、何という贅沢かと思う。

その他、神社仏閣も地味ではあるが、趣が深い。「奈良」で一番びっくりしたのが、「国宝」の多さ、というのか、「国宝」があちこちに無造作に存在することである。「国宝」なんていうものは「国の宝」だから、厳重に管理されているものだと思っていた。ところが、ここ奈良では別である。そのへんの建物や仏さまたちが「国宝」なのである。

皆さんも奈良を楽しんでください。

水彩画「柚子」

3 班 岩城 正大



3月号俳句

1 班 谷坂 修二

1 月

田原道弧娘柿踊る時雨かな
山宮の狛猿2対干支を待つ
雨一点負けるものかと柿赤く
村はずれ柿たわわに残りおり
観自在五感でにらむ弧娘柿



ギフチョウ 西谷の森公園 4月

自然と文化だより
皆さんのご協力により28号が発行出来ました。
次号もお楽しみに！(広報委員会)